第31停泊所

2025年12月24日
責任者:山口　明日波
編集者:武井　直人
阿部　翔太
紫波　圭

青年部反戦・平和学習会

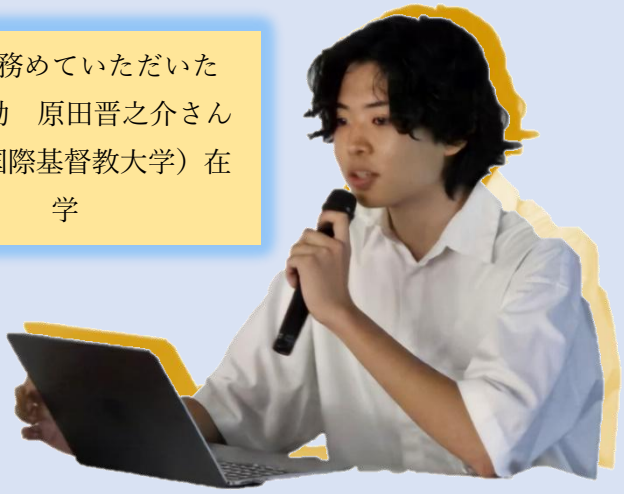
12月3日（水）清掃会館にて青年部反戦・平和学習会を開催してきました。当日は、講師に現役大学生の原田晋之介さんを招き講演形式の学習会を行いました。原田晋之介さんは、被爆4世の方で小学5年生の時から、継承活動を行ってきました。講演では、「原田さんの活動について」「原爆とはなにか」「浦上地区の歴史」「曾祖父の被爆体験」をお話していただきました。内容は、仲間にとっては苦しくなる部分もあったと思います。

今回、東京清掃青年部では初となる学習会でした。当日は、多くの仲間が参加した中で、当時、起きていた事やその家族だからこそ話せる話がありました。改めて戦争や原爆の恐ろしさを感じると同時に、反戦や「原爆とはなにか」を一人一人が、再認識し意識できた学習会になったと思います。今回の、学習会においての反省点や気づいた事は次回の「差別人権」などに活かし取り組んでいくのと同時に、反戦・平和学習会を来年も引き続き行えるように、企画をしていきます。

『伝承者としての葛藤...』

被爆の直接体験を持たない被爆四世として、何を語り、どう伝えるべきかという葛藤を抱えながら活動していた...。
しかし、活動する中で様々な出会い、「君は語るべき人なんだ」という周りからの後押しがあった。沈黙する事こそが人々の記憶を風化させてしまう想いから、模索を重ねながら伝承に向き合っている。私たちは、被爆当事者から直接お話を聞ける最後の世代と言われているからこそ、若い仲間同士で学び合い、共に伝承活動の一端を担っていってほしい。

講師を務めていただいた
伝承活動　原田晋之介さん
ICU（国際基督教大学）在学



来年の主な予定

1月中旬

青年部秋闘学習会

「生命と権利」を守る
１２．０８青年部総決起集会

１２月８日(月)に、清掃会館にて「生命と権利」を守る１２．０８青年部総決起集会を開催しました。今回は過去最多となる９３人の仲間が結集し、会場を最大限に活用しての開催となりました。

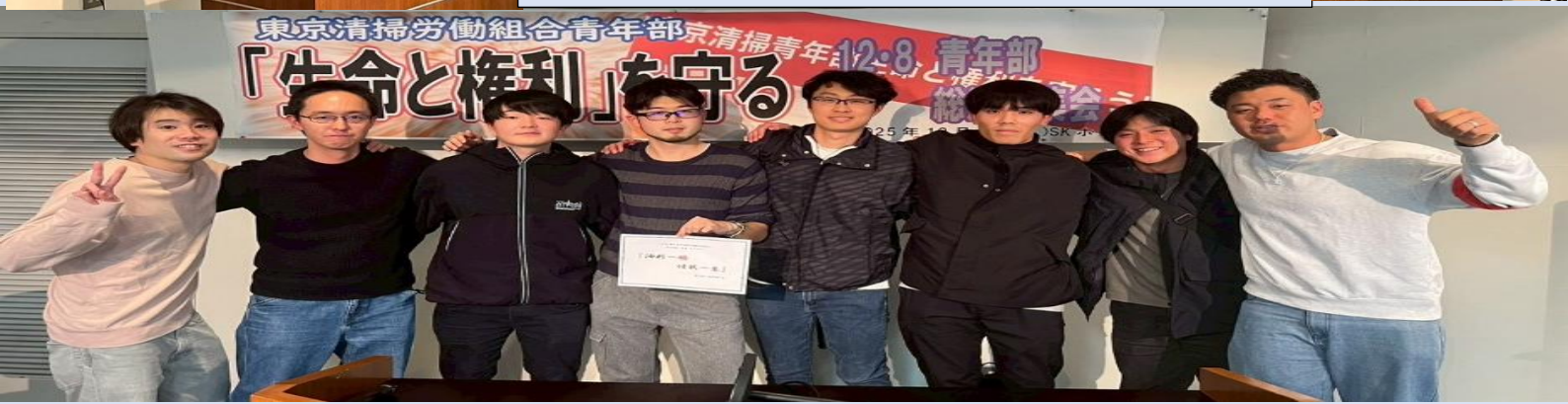
年末年始に向けて青年部で意思統一を図り、各地連と新宿支部からの決意表明を受けました。地連を代表した決意表明では、「地連内で独自のポスターを作成し、意識や言動を改めて作業に臨む」「役員会での情報共有で、運転手目線を体験する研修を実施した支部があり、後退誘導時の身振りや掛け声の大切さを再認識した。」などの発言がありました。新宿支部からは「後退誘導の怠りが原因の事故や、リチウムイオン電池による車両火災が報告されている。支部だけでなく、青年部一丸となって、職場環境を築き上げていく。」と青年の団結を鼓舞する決意表明がありました。

この取り組みは年末年始だけでなく、１年間を通して貫徹する必要があります。いつまでも安心して働き続けるために、一致団結して頑張りましょう👍

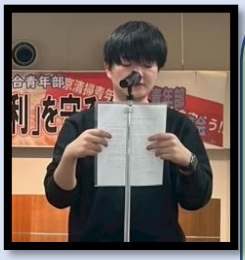
今年度のステッカーデザイン

【青年部長あいさつ】

いのけんのルーツは過去の悲惨な死亡事故からきており、喪章を付けて作業をする『喪章闘争』ということも行っていました。私たちには、安全作業をするため様々な貸与品があります。“自分だけが楽できればいい”のではなく、仲間全員で安全を守るためにも保護具を完全着用し業務に当たってほしいです。そして、本日仲間からの決意表明を聞いて、年末年始作業に向けて意思統一していきましょう！！



各地連・支部からの決意表明



私たち青年部第一地連では、各支部からの報告の中で作業着の袖捲りや、「早く仕事を終わらせたい」という気持ちからか走り作業を行ってしまったり、腰痛予防体操を行わずに作業を行い怪我をしたり、バック誘導を怠ったことによる接触事故などが発生しており、一人一人の意識がまだまだ根付いていないことが課題としてあげられています。年末年始作業では、ごみの量の増加やイレギュラーな環境での作業、街中では観光客も増加する時期なので、より一層注意をして作業をする必要があります。だからこそ、私たちは保護具の着用、腰痛予防体操、歩き作業、そして運転手や作業員同士のコミュニケーションを綿密に行うなどの安全作業における「基本の徹底」を図っていきます。それだけではなく、日常の業務から「どうしたらより安全に作業できるか」を一人ひとりが考え、地連内でも実態の共有をしながら、他支部に学び、試行錯誤をしながら運動を進めていきたいと思います。

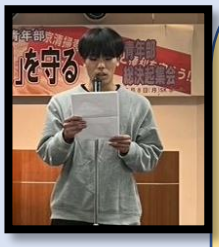
第一地連　真柄さん

私たち青年部第二地連は、昨年より役員会で話し合いを重ね、地連独自のテーマを掲げています。今年は、信号無視や一時停止無視、歩行者の急な飛び出しによって車両等が関係する交通事故が多く報じられていること、私たちが収集するごみの中にも尖端が鋭利な物や硬い物等、危険はあることからも「油断一瞬・怪我一生」を今年のテーマに独自でポスターを作成し掲示するとともに青年部で共有を図り意識しながらこれからの作業にあたっていきたいと思っています。 多くの方は、「俺は事故らない。俺は怪我なんてしない。」と油断はあるかもしれません。しかし、一つの油断から大きな事故、怪我に繋がり、取り返しのつかない状態になってしまうかもしれません。だからこそ、決起集会で皆さん一人ひとりが、自分自身の意識・言動を改め、作業に当たることが大切です。一人一人の意識付けにはまだまだ時間は必要ですが、自らの手で『生命と権利』を守っていくためにも、役員を中心に各支部との情報共有をより一層密に行いながら運動を進めていきます。

第二地連　鈴木さん

私たち清掃労働者は、慢性的な人員不足による一人ひとりの業務量の増加、地球温暖化による酷暑により、ゆとりを持った作業が行えず、現場での事故やケガが絶えない状況にあり、肉体的・精神的にも疲弊していると感じています。疲労が溜まった状態での作業は、確認不足・ストレスによって悪影響が出る事が考えられ、過去には組合員が亡くなってしまうという痛ましい重大事故が起きています。第三地連役員会での各支部報告の中では、作業着・保護具を完全着用しない職員がいると話がありました。なぜこのような状態になってしまったのか話し合うと、自分の作業しやすい様に被服を着用してしまっている人が多く見受けられるとの意見が出ました。しかし、その様な状況下でも作業に奮闘する姿を当局に認めさせなくてはなりません。私たちの作業着・保護具は、過去作業中に仲間の尊い「生命」が失われたことを教訓にし、繰り返さないために、組合活動により勝ち得たものであり、自分の生命を守る、また過去の仲間の意思を尊重する為にも、完全着用は必須であると声を上げていかなくてはなりません。しかし、一人で声を上げるのは非常に困難だと思います。だからこそ青年層から声を上げ、身近な先輩から巻き込み、いずれは全組合員の意識を変えられる取り組みを展開していきたいと思います。

第三地連　金田さん



一部の支部からは、急いだ作業がなくならず、排出指導を行う事もできず、ただ眼の前のごみを収集することしかできない実態が報告されています。これから年末年始作業を迎えるにあたり、そんな作業実態では事故を未然に防ぐことはできません。また、年末年始ビラの曜日看板への貼付といった収集作業と並行して行う業務もあります。安全作業、事故ゼロを声高に掲げるのであれば、収集時ではなくビラの貼付のみを担当する人員の確保、区のホームページ、広報、スマートフォンのアプリ等を活用するなど、時代のニーズに合った対応に変化させていくべきです。定年延長が行われ、この場にいる多くの仲間はこの先30年以上働くことになることからも、安全作業とはかけ離れた作業を断ち切り、私たち青年部が働きやすい職場、安全に作業を行うための改善策を提案していきましょう。私たち青年の柔軟な発想と団結力で「健康で安心して働き続けられる職場」の構築に向け、青年部が先頭に立ち声を上げ、一丸となって闘い続けます。

第四地連　篠原さん

私たちが定年まで安心して働き続けるためには、日常の収集作業の中に潜む危険や『安全作業』とは何かを作業員一人ひとりが考えることは必要不可欠です。10 月より新役員になってから、今日に至るまで第五地連内で様々な情報共有を行ってきました。その中で、第五地連で各支部に対し、年末年始作業に向け、作業中に危険だと思った時はどんな時かなどの質問アンケートを実施し、特に多かった意見としては「車から降りる時に歩行者や自転車とぶつかりそうになり危険だと感じた」「周囲の確認時に自身の後方や車の影等からの死角から自転車が飛び出して来た」というものでした。また、職場実態や業務に対し各支部、どのような取り組みを行っているかのアンケート調査も行い、ある支部では、年末年始作業に向けて特殊架装車や、軽小型車での後退誘導研修を実施していることがわかりました。普段、車両を誘導している職員が実際に運転席に乗車し、仲間の作業員にバック誘導をしてもらうことで、運転手からはどう感じ、いかに見づらく、いかに聞こえにくいのかをという研修です。このように運転手からの視点というものを体験することで、よりわかりやすい手振りや大きな掛け声の大切さ、重要さを再認識することにより、後退事故防止の向上を図っております。私たちは、過去に作業中に起きた悲惨な死亡事故を繰り返さないためにも、あらゆる合理化攻撃を許さず、生命と権利を守り続けていくために安全作業を心掛けます。

第五地連　高野さん

私は支部の安全衛生委員を務めており、そこでは毎月約 5~6 件程度の事件が報告されています。特に、作業員がバック誘導を怠ったことによる接触した物損事故、直近では不適正排出されたリチウムイオン電池による車両火災があげられています。こうしたリスクはひとつの支部の問題ではなく、清掃事業に関わる仲間全員にも降りかかるリスクと考えます。こうした事案を踏まえ、支部では装備品の定期的な交換、体操係による職員全員の腰痛予防体操の呼び掛け、作業員の負傷や事故等、不測事態の対応を記したマニュアル冊子の配布を行っています。これらは、現場を知る作業員が団結し声をあげたからこそ勝ち取れた権利であると考えます。勝ち取ったから終わりではなく、行動として徹底していくことが一番必要だと思います。また、新規採用が増え、作業員同士の年齢や経験の差が広がり、様々なギャップが生じた状態で現場に出ることも考えられます。そうした懸念に支部としてどう対応していくかが今後の課題であり、『他人事』にするのではなく、青年部間でも議論し合い、「支部の一端を担っているんだ」という意識を持ち行動していくことで、仲間の生命を守ることにつなげていきます。

新宿支部　松川さん